

男子体操競技審判員報告

審判長 森 直樹

第37回全国高等学校体操競技選抜大会が北海道札幌市で開催されました。前回大会は兵庫県神戸市で開催予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止となり、今大会は2年ぶりの開催となりました。しかしながら、新型コロナウイルスの猛威は未だ収まることを知らず、徹底した感染予防策をとった上での競技会実施となりました。また、選手の皆さんは各都道府県や学校からの指示により、十分な練習時間を確保できないまま迎えた競技会となったことでしょう。

今大会の監督会議は事前にホームページ上に公開された資料のみの実施であったため、適用規則（2017年版採点規則/情報29号）の確認のほか、Dスコアに対する質問に関することや、ウォームアップ時間についての説明を記載させていただきました。また、審判会議におきましては、審判員を招集し、対面で実施しました。適用規則等を全体で共有した後、種目ごとに映像等を使用して採点研修を行い、共通理解を図りました。

今大会を運営するにあたり、通常と変更した箇所として、選手席をアリーナ内の隅に設置したことにより、各種目の周辺に人が密集しないようにしました。また、競技開始前の整列・挨拶は審判席と距離を空けて実施することで選手と審判が対面にならないようにし、終わりの挨拶は省きました。他にも、会話のあるD審判とセクレタリーのテーブルの間に飛沫防止用のアクリル板を設置するなどの予防策を講じました。そのような環境下においても、選手および審判は冷静に対応し、演技実施や採点業務に支障がでることはありませんでした。

競技全体を通して、落下や転倒が例年に比べて特段に多かったことはありませんでしたが、静止時間の不足や着地の乱れなどの減点はとても多かった印象を持ちました。次項からは各種目の報告が記載されていますので、ぜひご一読いただき、今夏に開催される全国高校総体や、さらにその先の競技会に向けたトレーニングの指針になればよいと思っています。そして、今後も高校生全体の競技レベルが向上することを期待しています。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2017年版採点規則および情報29号の確認。
- ・技の認定、実施に際してはルールに則り厳密に採点する。
ニュートラルディダクションの確認。(2回宙返り技、全てのコーナーの使用、ライン、計時、技不足)
- ・減点が少なく、かつ雄大で美しさが求められた実施を評価する。
 - *安定した演技実施を基盤に、高められたDスコアを有する演技を評価する。
 - *美しさ、力強さを表現した演技実施を評価する。
 - *着地への準備局面を有し、高い姿勢で意識的に止められた着地の評価。
 - *雄大なタンブリングや正確なひねり技による先取りのある安定した着地。
- ・グループIの旋回技や力静止技において丁寧で美しさを表現する演技の評価。
 - *静止が求められる技においては厳密に判定する。
- ・ひねりを伴った宙返りの連続では、明確なひねりの終了を示して次の宙返りに連続すること。
- ・コーナーへの単純なステップや移動についても着目する。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・前方伸身宙返りひねりで、明確な伸身局面が見られない実施や膝のまがりが見られた実施はA難度と判定した。
- ・宙返りの連続において、2つ目の技で大過失と判定した場合は組み合わせ加点なしとした。
- ・ひねり不足については厳密に判定し、90°以上の不足の場合は低い難度で認定した。
そのため繰り返しとなり不認定となった実施が1件あった。

3. その他特記事項・意見・感想等

Dスコアの最高は6.1点、Eスコアの最高は8.55点であった。終末技において着地の止まった選手は、8名いたが、着地の準備の不安定さを感じる演技が多かった。全体としても終末技に限らず着地の不安定さが目立った。組合せ加点においてはD難度+D難度の加点0.2の組合せを構成した演技は2演技であった。いずれも後方伸身宙返り5/2ひねり(D難度)～前方伸身宙返り2回ひねり(D難度)の組み合わせであった。2回宙返り技については、前方かかえ込み2回宙返り(D難度)、後方かかえ込み2回宙返り(C難度)が多く見られた。D難度以上の2回宙返り技を2つ入れた選手は2名であった。2回宙返り技がなくニュートラルディダクションとなった選手は13名であった。

Eスコアにおいては、空中局面における脚の開きや姿勢欠点、宙返り連続技の1回目の宙返り技の高さやひねり不足、一つ一つの着地等が主な減点となった。また、十字倒立の肩の角度の高い実施が多く見られた。序列の上で着地の取り方、着地の姿勢がポイントとなっている。着地後に止まったことを表現する捌き、演技全体として減点がなく、かつ雄大さと美しさを持った演技が求められる。今後においても怪我には十分注意し、日々練習に励んでいただきたい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・ 2017 年版採点規則および情報 29 号の確認
- ・ 馬体すれすれの旋回ではなく、腰の位置の高い旋回を評価する。
- ・ 倒立を経過する技では停滞や停止、力の使用ではなくしっかりとスイングを使用し、腰の伸びた実施を評価する。
- ・ 終末技まで安定してコントロールされた実施を評価する。

認定不認定について

全てのグループⅡ.Ⅲの技は全てのグループⅡ.Ⅲの技に繋がるのが認定の条件である。
交差倒立ではスイングを使用し、上げた脚が下がることなく実施すること。

2. 採点上起こった事項とその処理

交差倒立で上げた脚が下がったため不認定とした。
前移動や後ろ移動の途中で落下したため不認定とした。
コンバインの途中で片手が馬体におちたため不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

試合数の減少からか落下が相次ぐ実施が多かった。落下内容を見てみるとグループⅢでのものが多く、その中でも前移動・マジヤール移動・シバド移動での大過失が大半であった。落下のなかった実施でも移動技での膝のゆるみやまがり、馬体へのぶつかりや擦りなどの減点が散見された。比較的早期に習得する移動技であり、D Score を高めるための技の実施に時間をかけている傾向なのか、まだまだ拾える減点が多かった。

今回のあん馬では平均 D Score が 4.2、最大 D Score が 6.0 であった。E Score が 8 点中盤や後半の実施では、腰の位置の高いスピードのある旋回であり、それぞれの技の後の旋回などにおいても腰をしっかりと伸ばした実施や向きに意識した実施が評価の高さに繋がった。引き続き D Score の向上とともにそれぞれの技のあと処理や細部にわたって美しさにも目を向けた実施を期待している。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・ 2017年版採点規則および情報 29号の確認。
- ・ 静止時間に対する減点（漠然とではなく、しっかりカウントを）
- ・ 振動倒立技の腕や腰のまがりについて
- ・ 力静止技の角度や姿勢
- ・ 振動からの力静止技での持ち込み角度
- ・ グループⅡ，Ⅲの連続制限
- ・ 同姿勢同EGの繰り返し
- ・ ニュートラルディダクション

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ 不認定と判定した技
 - * 後ろ振り上がり開脚水平支持は、開脚水平支持において静止姿勢がみられる前に腰のまがりが90°を超えたものについて総合的に判断した。
 - * 輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂に持ち込む際に45°を超える角度の逸脱があり、支持のみられた捌きについて総合的に判断した。
 - * 振動倒立技は静止姿勢がなく倒れたもの、45°を超える脚の下がりについて総合的に判断した。
 - * け上がり脚前挙において45°を超える脚の下がりや、90°を超える脚の下がりについては総合的に判断した。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会は様々なレベルの選手が参加し、技数不足となる演技から、D 難度や E 難度を多用する選手まで幅広い演技が見られた。

今回各審判には、静止時間を漠然と判断するのではなく、しっかりカウントをして判断するように審判会議の中で強調して説明した。その中で脚前挙等の単純な力静止技、振動倒立技において静止時間が不足している実施が散見された。個々の技において慌てることなく十分な静止時間が求められる。

終末技においては、E 難度が 10 演技、国内でも数少ない F 難度が 2 演技あったことは評価したい。小・中欠点をみると、難度表にない技での 2 秒以上の停滞や着地をはじめ、倒立や力静止技の姿勢に持ち込む段階での肘のまがりやベルトへの寄りかかり、体の反り、終末技の姿勢や着地の準備など、この観点によるものであった。脚前挙の姿勢や難度表にない技での 2 秒以上の停滞における減点などをはじめとし、これらは普段の練習から意識して取り組んでもらいたく、得点を上げるためには欠かせないものである。その上で、夏のシーズンに向けて D スコアを高める取り組みを期待したい。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2017 年度版採点規則および情報 29 号の確認
- ・姿勢欠点・技術欠点に対する減点の確認
- ・雄大さの欠如・軸ブレに伴う着地前準備及び着地のブレに対する減点の確認
 - 【全体として】
 - *第1局面での足の開きに対する減点
 - *美しさ・雄大性を表現した演技実施
 - *着地前の先取りが行われているかどうか
 - *意識的に着地を止めた実施かどうかの見極め
 - 【種目特有の評価のポイント】
 - *グループⅡ跳越技における垂直面からの外れに関する技術欠点
 - *グループⅠとⅡの判定が困難な実施に関する技術欠点

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・選手が意図した跳越技と異なる D スコアが付与されたケースはなかった。

3. その他特記事項・意見・感想等

86%の選手がグループⅡの跳越技であり、中でもアカピアンが最も多く 21 演技であった。ドリッグスは 8 演技、シューフェルトは 1 演技（優勝者）であり、5.6 以上の跳越技を実施する選手はいなかった。多くの選手が姿勢欠点を減らそうと努力しており、特に第 1 局面での脚の開きが目立つ選手は少なかったように感じられる。

コロナ禍での練習がどの程度詰めたのかは定かではないものの、危険な実施はなく、安定していた。逆に言えば、5.6 以上の跳越技がなかったことから、チャレンジングな競技会ではなかったのかもしれない。

高校生という発達段階ではまだまだ脚筋力も増大することが考えられる。D スコアを上げるためには、技術的なトレーニングもさることながら、筋力・走力トレーニングや怪我をしないためのトレーニングも必要となってくる。正確な実施を現状維持し、今後は爆発的な跳越を期待したい。

1. 採点上打ち合わせた事項

採点規則・競技規則について

- ・2017年版採点規則および情報29号の確認。
- ・ウォーミングアップは各選手に対し50秒が与えられ、タイマー表示をして伝える。
- ・ウォーミングアップ後に、第1演技者に対して最大で1分間の器械準備の時間を与える。

D スコアについて

- ・静止技において静止がみられない実施は不認定とする。
- ・実施された技がコントロールされずに（器械上に）落下したものは不認定とする。
- ・後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持やヒーリーの支持局面で大きく屈腕になる実施は不認定とする。

E スコアについて

- ・「前振り上がり」や「け上がり」、「モイ」については大きさを求め、支持の際に腰が下がるものは減点の対象とする。
- ・終末局面が倒立位の技における角度逸脱による減点は厳密に行う。
- ・「後ろ振り倒立」は振動を有効に使い、伸身姿勢を保って倒立まで持ち込まなければならない。「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」や「ヒーリー」などの後に力を使ったり、腰をまげたりにして倒立に持ち込むものは減点の対象となる。
- ・静止技における静止時間については厳密に判定する。静止時間が短い、または静止がみられない実施は相応の減点の対象となる。
- ・「バブサー」、「モイ」、「チッペルト」の振り下ろす際の膝の割れや懸垂時の膝の緩みなどの減点は厳密に行う。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」で大きく肘のまがった実施は不認定とした。
- ・「チッペルト」において、脚部がバー上にのったものは器械上の落下とし、不認定とした。
- ・「ディアミドフ」において、倒立でコントロールできずに落下したものは不認定とした。
- ・「脚前挙支持」や「伸腕屈身開脚力倒立」において静止がみられない実施は不認定とした。
- ・静止を求められる技において、静止時間が不足した実施には減点もしくは不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

平行棒の演技は振動技や空中局面を伴う技を組み合わせて構成され、最終的には倒立や脚前挙などの静止を求められる技におさまります。今大会、静止時間の不足による減点が多く見られました。後ろ振り倒立、脚前挙支持、伸腕屈身開脚力倒立などで明確に2秒静止しない場合は大きな減点が伴います。今一度確認をお願いします。また、前方開脚宙返り抜き腕支持の受け方に課題がある実施も多くありました。今回、着地の止まった演技が少なく感じました。着地にまで意識した演技を心がけてください。

新型コロナウイルスの影響で思うように練習ができない状況下での大会ではあったと思いますが、その中でも一つ一つ課題を克服していってほしいと思います。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・ 2017年版採点規則および情報 29号の確認。
- ・ 安定した演技実施を基盤に、高められた D スコアを有する演技を評価する。
- ・ 美しさ、力強さを表現した演技実施を評価する。
- ・ 着地への準備局面を有し、意識的に止められる終末技を評価する。
- ・ 雄大な手放し技や正確な終末技を評価する。
- ・ 倒立位を経過する技、ひねりを伴う振動技での角度減点の少ない実施を評価する。
- ・ その他
 - * エンドー・シュタルダー・ワイラーの開始局面で倒立位からの逸脱は減点対象となるが、アドラー系の技については開始局面で倒立位から行う必要はない。
 - * 浮腰回転ひねり系の技において、ひねりの前に倒立で停滞するような捌きは減点であり、その上分割した難度認定の可能性はある。片大逆手になる技で高い位置でバーを握ってもひねりが完了していない実施は減点となる。
 - * 手放し技や終末技の前の車輪での膝まがりは実施減点となる。
(60° まで : 0.1、60° を超える : 0.3)

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、ひねりの度合いを総合的に判断した。明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施はボローニン (B 難度) と判定した。
- ・ 手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは実施減点とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会は、全体として D スコアが低い印象を受けた。その分丁寧に捌き減点を少なくしようという演技も見られた。一方、落下や技術欠点などの減点が多い演技も多くみられた。上位に入る選手は D スコアも高く安定した実施であった。

出場選手 67 名のなかで、D スコア 5.0 以上の選手は 8 名 (前回 14 名、前々回 17 名)、最高 D スコアは 5.8 (前回 5.7、前々回 5.6) であった。D 難度以上の技の出現数を昨年度と比較すると、グループ IV (56→59) が増加し、グループ I (6→2)・II (88→70)・III (30→21) が減少している。手放し技の連続は見られなかったが、グループ II を演技に複数入れる選手も多くみられた。また、角度で減点されやすいグループ III の技で難度を落とし確実に倒立位で捌き E スコアを上げようという選手とコーチの戦略が感じられた。

E スコアについては、美しく丁寧な演技を意識している選手と、技を実施することで精一杯の選手との差が大きかった。手放し技や終末技前の車輪での膝まがり、手放し技後の車輪での肘まがり、倒立位を経過する技やひねりを伴う振動技での角度等だけでなく、シュタルダーやアドラー開始時において、つま先や膝のまがりの目立つ選手が非常に多かった。角度に対する減点に注意が向きがちになるが、つま先・肘・膝等、日々の「美しい体操」に対する意識の積み重ねが、美しさ・雄大さ・力強さを表現し、魅了する技捌きまで昇華することを期待する。